

様態副詞の程度副詞化：
「ちっと／そっと」の対照から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 深津, 周太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028823

様態副詞の程度副詞化

— 「ちっと／そっと」の対照から—

深 津 周 太

キーワード：様態副詞 程度副詞 「ちっと」「そっと」 程度副詞化

1 はじめに

日本語史上、‘程度・量の小ささ’を表す程度副詞は、「ちっと／そっと／ちよつと／ちよいと…」(以下、〈ちよつと類〉)といった〔擬態語＋と〕に由来する形式によって担われてきた¹。これらはいずれも、動作や変化の仕方および出来事のあり方(状態)を具体的に表現する様態副詞であったものが“程度副詞化”したものだといえる²。〈ちよつと類〉の多様さを見れば、当現象が日本語の歴史において繰り返し起こってきたことが分かる。

本稿では、このうち「ちっと／そっと」という二語を対象として、その程度副詞化の具体的プロセスを論じる。両形式の程度副詞化は、当該語群の中でも早い中世期に生じたものである。

ここでは中世末期の様相として、『日葡辞書』に見られる両形式の記述を確認しておく。

- (1) Chito. チト 副詞. 少し. / Chitto. チット ほんの少し
- (2) Soto. l, sotto. ソト. または, ソット 副詞. 少しばかり.

¹ 仁田(2002)は‘程度・量’を表す副詞を、程度のみを表す「純粋程度副詞」、量のみを表す「量副詞」、その両方表せる「量程度副詞」に分類しているが、本稿における〈ちよつと類〉はこのうち量程度副詞に該当する。

² 事態の様相と程度量を表す副詞を典型的な副詞とする小柳(2019)の捉え方では、程度副詞はまさにその典型語類である一方で、ここでいう様態副詞は形容詞と一括されて副詞の外側に位置づけられる。その意味では当該現象は“副詞化”そのものということになる。なお本稿の副詞にまつわる用語は筆者の立場を示すものではなく、あくまで本内容を論じるにあたって理解しやすいと考えられるものを選択したに過ぎない。

様態副詞>程度副詞という現象は、言うまでもなく意味変化（動作等の有り様>程度・量）として捉えることができる。ただし、一口に‘程度・量’と言ってもその表現範囲は多岐に亘っており、具体的にどの意味領域を入り口として、どのように／どこまで拡張を遂げるかについては、形式ごとの分析が欠かせない。

また、様態副詞がもっぱら連用修飾にはたらく一方で、程度副詞は名詞的な位置に立ち、述語句構成（ex. ちよつとだ）やノ連体句構成（ex. ちよつとの間）に参与しうるという点にも注意せねばならない³。つまり程度副詞化とは、名詞的用法の獲得という統語的側面の変化をも孕むのである。

そこで本稿では、「ちよつと／そつと」の程度副詞化を意味的／統語的性質の両面から記述し、またその二つの面が相互に関わり合う可能性を述べることにする。

以下、2では本稿で扱う程度副詞の意味機能について確認する。それに基づき、3では「ちよつと」、4では「そつと」の具体的な程度副詞化プロセスを明らかにする。5はまとめである。

2 程度副詞「ちよつと／そつと」の意味機能

程度副詞には意味的な幅がある。本稿ではその意味機能を「ちよつと／そつと」に関わるものに絞り、大きく三つに分ける⁴。

【量】…具体物の数量（の小ささ）を表す

ex. 水がちよつとこぼれる／ちよつとの水、かなりこぼれる／かなりの水

【時間量】…事態存続の時間量（の小ささ）を表す

ex. ちよつと経つ／ちよつとの間、かなり経つ／かなりの間

【程度】…事物の属性や状態の度合い（の小ささ）を表す

ex. ちよつと難しい／ちよつとの工夫、かなり難しい／かなりの工夫

形態的な変化を伴わない「ちよつと／そつと」の程度副詞化を扱う上で肝要なのが、何を以て程度副詞の確例とみなすかという点である。本稿では深津（2016a,b）に従い、①前後の要素との意味関係から程度的意味を表していることが明らか

³ 夙にこの点に言及したものに寿岳（1983）がある。また、田和（2011）が「評価的な程度副詞」の特徴として同様の性質を挙げている。

⁴ **【程度】**や**【量】**からの派生による後発的なものと考えられる評価の意味は、今回の議論には関わらないため扱わないこととする。

なものと、②名詞的な位置に現れたものを確例とする。以下に具体的なタイプを示す。

〈①明らかに程度的意味を表しているもの〉

[+形容詞] タイプ：形容詞を修飾

(3) a. 是ハチツト無理ナ怨ミコトナレトモ (史記抄、十六33ウ)

b. 涼ハ多ハナイソ、ソツト涼イ心ソ (詩学大成抄、五68オ)

[程度副詞+] タイプ：程度副詞を上接

(4) a. マチト学問メ後ニ仕ヘ (論語抄、p224)

b. 今ソツト紅ナレハ (四河入海、十四ノ二17ウ)

〈②名詞的な位置に現れるもの〉

[+副助詞] タイプ：程度を表す副助詞を下接

(5) a. チツトツ、次第ノニ食テ (史記抄、十68オ)

b. 小雨ガソツトバカリモフリタルモノゾ (三体詩素隠抄、I 168)

[+コピュラ] タイプ：コピュラを下接

(6) a. 大ナ所モチツトニミユルソ (詩学大成抄、三3ウ)

b. 此ヤウナ人ニソツトナリ共アイ逢タラハ (毛詩抄、四45オ)

[+格助詞] タイプ：「ノ」を下接

(7) a. 是ヲチトノ罰ナホトニ自ラハキウメイセヌ (蒙求抄、六51ウ)

b. 一朝一タノソツトノアイタ思事テハナイ (毛詩抄、十六38ウ)

②を確例とみなしうるのは、当期における他の「擬態語+と」型の副詞が②のような位置に現れないことによる。様態副詞としての「ちっと／そっと」はその副詞としての性格(＝“副詞性”)が顕著であるのに対し、程度副詞としての「ちっと／そっと」は名詞的な性格(＝“名詞性”)をも備える点に両者の大きな差異があるといえよう⁵。

なお、上記以外のもの、すなわち程度副詞の確例とみなせないものは「その他」と一括する。概ね、以下のようなものが含まれる。

[その他]

(8) a. ソツト目クハセシテ (史記抄、五27ウ) [+動作性述語]

b. チツト短所カアルト云ソ (史記抄、二1ウ) [+存在動詞]

⁵ ただし、「ちっと／そっと」の名詞性がなぜ、どのように獲得されるかについては明らかになっておらず、ここでは先行論(注2参照)や深津(2016a、b)で得られた成果を踏まえ、仮説的にこの基準を設けることとする。

c. アレヲモチツトハユルシテ (百丈清規抄、p182) [+係助詞ハ]

d. 高倉の院の幼いを時にそつとも違わぬ

(ヘイケ、199) [+係助詞モ]

e. 梅ノ花ノハヅレノソツト白ウミエタハ… (玉塵抄、六350) [判断不能]

※ソツト [白ウ] /ソツト [(白ウ) 見エタ]

こうした基準を設けることで、各形式の程度副詞化が起こった時期をある程度絞り込むことができる。つまり①②のタイプが出現する時期こそ、その形式が程度副詞化した時期にあたると思われる。

3 「ちつと」の歴史的変化

3.1 程度副詞化 (13C~14C)

「ちつと」(「ちと」を含む) は中世を通じて頻用される。当期におけるタイプ別の用例数を確認しよう。

表1によると、13C中頃までは出現タイプが[その他]に限られており、程度副詞としての確例が得られない。そこで、初出期にあたる『宇治拾遺物語』(1213-21)、『古今著聞集』(1254)の[その他]15例を見ると、その全てが動作性述語を修飾したものであることが分かる(→(9))。このことは当期の「ちつと」が動作の有り様を表す様態副詞であったことを示唆する⁶。

表1

		+格	+コ	+副	程+	+形	その他
13C	宇治拾遺物語						2
	古今著聞集						13
	沙石集					2	2
14C	平家物語					1	2
	太平記					1	17
15C	論語抄			1	6		18
	漢書抄	3	3	5	1	10	49
	史記抄	12	9	17	3	49	107
	15C抄物	16	17	16	31	26	423
16C	16-7C抄物	18	43	12	21	29	739
	玉塵抄	2		20	11	34	216
	キリシタン資料						8
	狂言台本		1		4	5	154

※15C抄物…当該時期における『論語抄』『漢書抄』『史記抄』以外の抄物。

- (9) a. 勅使、帰参りて、かうかうと申ほどに、三日といふひるつかた、
ちとまどろませ給ふともなきに、きら／＼とある物の見えければ
(宇治拾遺物語、101)
- b. 此程、水瓶の来て、水をくみ候つるときに、いかなる人のおはし
ますぞと思候て、みあらはし奉らんとて参たり。ちと試みてま
つらんとて、加持しつるなり (宇治拾遺物語、173)
- c. 七日にあたる夜、待かねてちとまどろみたりけるに、かはらけの
われをもて頼度がうへにはら／＼となげかけゝり (古今著聞集、
602)
- d. 此事たび／＼になりける時、重忠ちと居なをりて、「君の御大事何
事にて候とも、いかでか子細を申候はん」といひたりければ
(古今著聞集、38)

共起動詞（異なり語）は「まどろむ、試む、案ず、召す、取り替ふ、居直る、見る、物申す、摘む、思ふ」の10語で、いずれも「ちっと」に直接下接している。動詞群に意味的な偏りは見られないことから、この「ちっと」は単に“動作の軽度”全般（以下、【軽度】）を表すものと見る。さらに遡れば特定の動詞と共起してより限定的な様態を表していた可能性はあるが⁷、今回の調査ではこれ以前の用例は得られなかった。

ここでいう【軽度】とは、動作の実現の仕方であると同時に事態に関する程度を含意するものである。後者の意味の前景化によって【程度】の意味が獲得された＝程度副詞化が起こったと見たい。それを受け、共起する述語が動作性のもので状態性のものでと拡張した結果が「+形容詞」の出現につながったと考えられる⁸。

- (10) a. 「日来はチト水クサキ酒ニテ候ニ、イカニ」ト云ケレバ、「サモ候
ラム。酒ニ水入ル、ハ罪ゾト被仰候ツル時ニ、コレハ、水ニ酒ヲ
入テ候」トテ (沙石集、巻6)
- b. 其釜ニ入レラレテ、ニエシ時ハ、ニエアガリ／＼セシ時ハ、ニエ
アガリタル時、チトス、シキ風ニアタリテ、息ノブ事モ候シガ

⁶ 従来、辞書類では初出期の例に対しても程度副詞としての解釈が与えられることが多かった。しかし、用例が散見され始める中世前期の「ちっと」の様相を見る限り、その見方には疑問が残る。

⁷ 柳田(1972)は擬態語の意味変化の方向として「限定」と「拡大」がありうることを指摘しているが、この時期の「ちっと」が、すでに後者の変化を経ている可能性も十分にある。

⁸ (10b)～(10d)のように「ちっと+形容詞+N {が／を／に} +動詞」のような場合、「ちっと」は「チトゴザカシゲナル [遁世者] ノ有」のように名詞句内で形容詞を修飾しているとする。

(沙石集、巻6)

c. 「あれはめのとが申」などいふ間、無下におさなきをば水に入、
土に埋み、少(ちと)おとなしきをばおしころし、さしころす
(平家物語、巻第12)

d. 磯ニ立並デ是ヲ見物シケル者共ノ中ニ、些(ちと)コザカシゲナル
遁世者ノ有ケルガ、傍ヘノ人々ニ向テ申ケルハ

(太平記、巻第38)

こうした【程度】の獲得に伴い、14Cには【量】へのさらなる意味拡張が起こる。当期の〔その他〕の中に見られ始める存在動詞との共起例に注目しよう。

(11) a. 或時土岐桔梗一発ノ中ニ、些(ちと)ナマ才覚アリケル老武者、
龍山ノ城ヲツク／＼ト守リ居タリケルガ (太平記、巻第34)

b. 其比(ソノコロ)師直ちと違例ノ事有テ (太平記)

これらの「ちと」は、事態の【程度】を表しているとも項名詞の【量】を表しているとも解釈可能である。この点に意味拡張の要因を求めることができよう。(11)の場合、「ナマ才覚アリケル」「違例ノ事有」という事態の【程度】が「ちと」であるという表現が、「ナマ才覚」「違例ノ事」の【量】が「ちと(ある)」と読み換えられれば、【程度】から【量】への拡張が生じることとなる。

以上のように「ちと」は、13C後～14Cにかけて程度副詞化したと見られる。その具体的な広がり方は、意味的な連続性に基づく【様態：軽度】→【程度】→【量】という漸進的なものであった。なお、この時期には【時間量】の獲得までは至っていない。

またこれらはいくまで連用用法の内部で起こったものであることに注意したい。つまり当期の「ちと」は本来の様態副詞がもっていた顕著な副詞性をそのまま受け継いでいるのであり、この段階では名詞性の獲得には至っていない。

3.2 用法・意味の拡大(15C～)

3.2.1 統語的側面：連用領域での用法拡張～名詞性の獲得

15Cに入ると、前期までには見られなかった種々のタイプが出現するようになり、最終的には名詞性の獲得が果たされる。具体的な流れを以下に述べる。

もっとも成立の早い『論語抄』には、それまで見られなかった〔程度副詞+〕〔+副助詞〕が初出する。

まず〔程度副詞+〕は、連用修飾用法において程度副詞化した「ちと」が、その範囲内で用法を拡大したものと考えられる。

(12) a. 私ノ学業未熟也。[マ]チト学問メ後ニ仕ヘシ。此分テハ人カ信セマイホトニト云 (論語抄、p224)

b. 其如ク学者カツトメテ学文稽古ヲセンニ今トレチハ成立スヘキヲ、クタヒレテ打ヲカハ我モヲクヘシ。アタラシイ更ツ。[マ]チツトセヨトハス、メマシキ也 (論語抄、p408)

これらは「(い) まちっと」全体で一語としてのまとまりをなし、累加的意味を表す副詞として「ちっと」単独とは異なるふるまいを見せるものである。

たとえば同資料には、これらを「の」で受けてノ連体句を構成したものが見られる。しかし、この段階では単独の「ちっと」を「の」で受けた例は見当たらない。従ってこれはあくまで「(い) まちっと」全体が名詞的に用いられたものとみなし、「ちっと」の [+格助詞] としては扱わないこととする⁹。

(13) a. 月令ニ命 (一メ) 三有司大儺スト云。十二月ハ一年ノ急ニ非ス。今年ハイマチト[フ]コトナレハ國民ハ難 (ママ) セス。有司ノ官ハカリ追也。今此ニ云ハ三月ノ儺ノ事也 (論語抄、443)

b. 一モツコニ成テ退屈メヲカハ我モ置ヘシ。今チト[フ]ナレハ勉テセヨトハ云マシキナリ (論語抄、407)

次に [+副助詞] の例を見よう。このタイプの「ちっと」は、助詞によって承けられるという点において名詞的ともとれる一方で、全体として連用句を構成する点ではむしろ [+形容詞] や [程度副詞+] と連続的である。

(14) a. 天子ノ虎皮ヲ用ルナレハ、虎ハ猛獸也。是ヲイル心ハ如何ナル強獸ヲモ降伏スル也。次第二チツト[ツ、]劣ル獸ヲイル也。

(論語抄、p163)

b. 初欲一チツト[ツ、]ナライツ補ツスルツ、義ノヨクモ不心得處ニハ重テ注ヲスルツ (史記抄、二120)

程度副詞「(い) ま」や副助詞「ずつ」は、‘程度・量の小ささ’を表す副詞性の語に結びつくものであり、上記二つのタイプの出現は、「ちっと」が程度副詞としての性格を強めつつあったことを意味する。

最後に、ノ連体句を構成する [+格助詞]、述語句を構成する [+コピュラ]

⁹ 現代語「もうすこし／もうちよっと」は、ノ連体句を構成する場合、「継続時間量」(ex. もうちよっとの辛抱) もしくは「時空間量」(ex. もうちよっとの間＝本論でいう【時間量】) しか表さない。そのため程度副詞のノ連体句について扱った笹本(2004)では、これらは「すこし／ちよっと」とは別個の程度副詞として取り上げられている。なお、(13)の例は【時間量】の例とも捉えることができそうであるが、これらは「今年 [の] 日数 ハイマチト」という【量】的な表現と見るべきであろう。

といったタイプが、15C中～後の『史記抄』『漢書抄』以降に現れる¹⁰。

- (15) a. チット[㊦]トカヲハラシカクスソ、不思議二人ノトカヲ云タカルモノカアルソ (漢書抄、42)
- b. 実以無為有以少一ナンテマリスルコトハナウテ、チット[㊦]事ヲ針ヲ棒ニ云ナシテ (史記抄、十七4ウ)
- (16) a. 言我浅薄之才テ史記ヲ注スルヲ云ソ、下句モ同心ソ、チット[㊦]ナレトモ益モアラウト云心ソ (史記抄、二4オ)
- b. 三皇以来武帝ホト拓地テヒロメタ人ハナイソ、昔ハチット[㊦]アツタソ (史記抄、十四23ウ)

この段階で「ちっと」が名詞性を示す統語的位置に出現することとなった。とはいえ、名詞がもつ多様な用法に鑑みたととき、名詞的な「ちっと」が出現するのはそのごく一部でしかない。

そもそも「ちっと」の〔+格助詞〕とは実質的に連体句「ちっとの」に限られるのであり、項名詞句「ちっと {が／を／に}」を構成することはない¹¹。また、〔+コピュラ〕の内実を見ても、主語名詞句の属性表示を行うことをもっぱらとする¹²。

(16a)' [(益は) チットナレ] トモ益モアラウト云心ソ (史記抄、十七4ウ)

(16b)' 三皇以来武帝ホト拓地テヒロメタ人ハナイソ、[昔(の広さ)ハチットテ] アツタソ (史記抄、十四23ウ)

これらは形容詞の主要なはたらきと一致している。つまり「ちっと」の名詞的用法とは、モノ・コトガラの性質・状態を表す点で形容詞に近い意味をもつ「ちっと」が、統語面において形容詞的なふるまいをするため名詞の形をとったものだと考えることができよう。

以上述べたように、「ちっと」の各タイプの出現順序は概ね、[状態：+動作性動詞] ⇒ [＋形容詞] → [程度副詞＋／＋副助詞] → [＋格助詞／＋コピュラ] である。程度副詞「ちっと」は、まずは本来の様態副詞がもつ顕著な副詞性を受け継ぎ、続いてその範囲内で漸進的に用法を拡張させることで程度副詞とし

¹⁰ 『論語抄』に〔＋格助詞〕が見られないのは、「ちっと」の母数自体が少ないことに起因するという疑いもある。しかし、『論語抄』には「少しの」というノ連体句が少なからず見られる。「ちっとの」がすでに可能だったのであれば、当該文脈に現れ得たはずである。

¹¹ ただし、「錢チット[㊦]以テ大トスルソ」(史記抄)のように、「ちっとの錢」というノ連体句を前提とした遊離構文は可能。

¹² 〔＋コピュラ〕の大半を占めるのは「ウツクシイ人チャホトニチトナリトモ見タイト思ヘトモ」のように「なり-とも」が後接するものである。

ての性格をさらに強め、最終的に程度副詞の特徴である名詞性を獲得したことが分かった。

3.2.2 意味的側面：【時間量】の獲得

15C以降の程度副詞「ちっと」の意味面に注目すると、14Cまでは見られなかった【時間量】の例が現れている。

- (17) a. 残ハ皆久ケレトモ人道ハチツト^ノ間テ壽ハ百年マテモナイソ
(百丈清規抄、一45オ)
- b. 造一^ノチツト^ノ間モ不可忘ソ (古文真宝桂林抄、坤7ウ)

【量】や【程度】から【時間量】への意味拡張は、変化の方向として蓋然性のあるものといえよう。特に(15a)「咎」、(16a)「益」といったコトガラの【量】や、【程度】が表すいわば属性の量(→(15b))といった、抽象的な事態量を契機としたことが見込まれる。

また、ここには[+格助詞]タイプの獲得が関わっていると見たい。【時間量】の用例が出現する位置としてもっとも典型的なのは、「～の+時間名詞」¹³という名詞句においてである。ノ連体句としての使用が可能になったことにより、【時間量】としての使用機会が得られたと考えられる。ただし、当期における「ちっと」の【時間量】の用例は多くない。これは後述するように、当期の【時間量】は主に「そっと」が担っていたためである。

以上、意味機能の出現順序は、【程度】→【量】→【時間量】であることが確認された。

4 「そっと」の歴史的変化(深津2016)

つぎに、「そっと」に目を向けてみよう。表2からは、「ちっと」の場合とは対照的な用例分布が確認される。

表から読み取れる程度副詞「そっと」の大まかな展開は以下の通りである。

- I 程度副詞としての確例は名詞的用法、特に[+格助詞]タイプが先行。
- II 16C以降に[程度副詞+][+形容詞][+副助詞]といった副詞性の強いタイプへと使用の幅を拡張。

¹³ 仁田(2002)は「運動量の度合いの低さと(略)時間量の短さとの、そのどちらが優勢なのか、きわめて微妙なもの」もあるが「それに対して、「～の間」を付加すれば事態の時間的な時間量であることが明示される」とする。

表2

		+格	+コ	+副	程+	+形	その他
13C	宇治拾遺物語						1
	古今著聞集						1
14C	太平記						1
15C	論語抄	3					
	漢書抄	2					5
	史記抄	2	2				15
	15C抄物	24	7				88
16C	16-7C抄物	49	2	4	2	7	124
	玉塵抄	39	3	1		4	204
	キリシタン資料	1				1	8
	狂言台本	1			3		99

つまり、副詞性>名詞性という統語的性質の獲得順序であった「ちっと」とは逆方向の展開を見せるのである。以下、深津（2016）をまとめる。

～14C **様態副詞：動きや変化の【素早さ】** ※すべて [その他] =動作性

(18) a. 人の身太きといふとも定めて一尺には過ぎぬなり、それを真中を
さして射給へり、弦おと聞きてそとそばへをどるに五寸はのくなり
(古今著聞集、347)

b. 北ノ小門ヨリ出給へバ、築地ノ陰ニ、用意ノ御馬ニ手綱係テ引立
タリ。小島次郎ソト寄り、搔懐キ奉テ馬ニ打乗セ進セテ
(太平記、巻35)

↓ **【時間的意味（素早さ→時間量）を契機とした程度副詞化】**

※【時間量】の典型である「そっと+ノ+時間名詞」に集中

15C前 **【+格助詞】：【時間量】→【量/程度】** ※タイプ内で意味拡張

(19) a. 四五十ニナルハソト間ナレハ若年ノ時ヲスコサスメ勤学セヨト
(論語抄、p410)【時間量】

b. 江ノハシマリハ蜀ノ岷山カラ出ソ、ソノミナカミハ、ソツト水
ナリ
(詩学大成抄、三39ウ)【量】

c. ソレニハ非スメソト度ニ怒テ其身ヲ失イ剩禍親類眷属ニ及ス
(論語抄、514)【程度】

↓ **【名詞的用法の範囲内での拡大】**

15C後 **【+コピュラ】**

- (20) a. ワルイ者ヲ用ハワルイソ、ソツト^{ナリ}トモヨイ者ヲ用レハヨイ事
ヲ云ソ (史記抄、十63オ)
- b. 此ヤウナ人ニソツト^{ナリ}共アイ逢タラハ願ヒニ當ラウソ
(毛詩抄、四45オ)

↓ 【全タイプへの拡大】

16C [+副助詞／程度副詞+／+形容詞]

- (21) a. 春ノ夜ハ短ケレバ、ソツト^{バカリ}見タソ(三体詩素隠抄、I 158)
- b. ^まそつと堪へい、祈退けてとらせうと云て
(狂言六義・蟹山伏、下205オ)
- c. 涼ハ多ハナイソ、ソツト^{涼イ}心ソ (詩学大成抄、五68オ)

「そつと」のタイプ別の出現順序を整理すると、[様態：+動作性述語] ⇒ [+格助詞] → [+コピュラ] → [+副助詞／程度副詞+／+形容詞] となる。程度副詞「そつと」は「ちつと」とは逆に、名詞的用法を端緒として後に副詞性を強めていったものである。

また意味的には、先行して出現する [+格助詞] というタイプの中で【時間量】 → 【量／程度】 という意味拡張を果たす。この順序は、「ちつと」に見られた【程度】 → 【量】 → 【時間量】 と逆である。

5 まとめ

本稿で述べた「ちつと／そつと」の程度副詞化は、意味の抽象化を直接的な契機としたものであった。また、両者は程度副詞が備える意味（【程度】【量】【時間量】）および統語的性質（副詞性・名詞性）を段階的に獲得する点でも一致しており、結果として中世末期には用法上の差を持たなくなっていたと考えられる（→ (1)(2)）。

しかし、その意味拡張・統語的性質の獲得の順序はそれぞれ異なっている。これは、「ちつと／そつと」の様態副詞としての本来の意味の異なりに起因するものであった。程度副詞の意味領域には一定の幅があり、どの意味を入り口とするかは様態副詞そのものの語彙の意味に係ってくる。また、各意味が現れやすい統語的位置には偏りがあるため、どの意味を介して程度副詞化するかという問題は、どのような統語的性質をはじめに獲得するかということに不可避の影響を与えることとなる。

動作・状態の【程度】を表す場合、連用表現（ちょっと美しい／副詞性）によって行われることの方が、連体表現・述定表現（ちょっとの美しさだ・美しさはちょっとだ／名詞性）よりも頻度が高い。そのため、【程度】を介して程度化した「ちっと」は副詞性を先行させ、名詞性はその後の変化の中で獲得された。

一方、【時間量】は時間名詞の連体修飾（ちょっとの間）に用いられることを典型とする。よってこの意味機能を介して程度副詞化した「そっと」は、はじめから強い名詞性を見せたと言える。

以上、二つの程度副詞化のプロセス解明を通して、当該現象においては‘意味拡張の順序’と‘名詞性獲得の順序’が相関的な様相を見せることが確認された。

【参考文献】

- 小柳智一（2019）「副詞の入り口—副詞と副詞化の条件—」『認知言語学を拓く』、くろしお出版
- 笹本明子（2004）「程度副詞＋ノ＋N」における程度副詞の意味構造」『奈良教育大学国文 研究と教育』
- 寿岳章子（1983）『室町時代語の表現』、清文堂出版
- 田和真紀子（2011）「程度副詞の評価性をめぐって」『宇都宮大学教育学部紀要』 61- 1
- 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』、ひつじ書房
- 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』、くろしお出版
- 深津周太（2016a）「〈ちょっとした型〉連体修飾表現の成立と定着」『国語と国文学』 93- 2
- 深津周太（2016b）「〈ちっと〉類連体表現の歴史—二つの型による機能分担の形成過程—」『日本語の研究』 12- 2
- 柳田征司（1972）「抄物に見える擬声擬態の副詞」『愛媛大学教育学部紀要 第2部 人文・社会科学』 4 - 1

【参考資料】

【説話集】

◇宇治拾遺物語・古今著聞集・沙石集

【軍記物】

◇平家物語・太平記

【15C抄物】

◆応永27年本論語抄：中田祝夫編著『抄物大系』、勉誠社◆杜詩続翠抄・漢書抄・古文真宝桂林抄・古文真宝彦龍抄・百丈清規抄・山谷抄・日本書紀兼俱抄・日本書紀桃源抄：大塚光信編『続抄物資料集成』、清文堂出版◆史記抄：岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成』、清文堂出版

【16-7C抄物】

◆玉塵抄：中田祝夫編著『抄物大系』、勉誠社◆毛詩抄・蒙求抄・四河入海：岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成』、清文堂出版◆莊子抄：大塚光信編『続抄物資料集成』◆三体詩素隠抄：『抄物小系』◆詩学大成抄『新抄物資料集成』

【キリシタン資料】

◆天草版平家物語：江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引』、明治書院◆エソポのハブラス：大塚光信・来田隆編『エソポのハブラス 本文と総索引』

【狂言台本】

◆虎明本：北原保雄・池田廣司『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇』上・中・下、表現社◆天理本：北原保雄・小林賢次『狂言六義全注』、勉誠社 近世前期上方

◇で示したものはすべて『日本古典文学大系』（岩波書店）を参照した。

本稿は、2016年7月9日、名古屋大学国語国文学会のシンポジウム「副詞と名詞の交差—機能語の形成・派生と文法変化—」における発表を元になっている。また、本稿の執筆はJSPS科研費18K12397の助成を受けた。

(要旨)

本稿は、“程度・量の小ささ”を表す「ちっと／そっと」という二語を対象として、それらが元来の様態副詞から程度副詞へと変化するプロセスを論じたものである。両者は程度副詞が備える意味的性質（程度・量・時間量）と統語的性質（副詞性・名詞性）を段階的に獲得する点で一致するが、その獲得順序はそれぞれ異なる。これは元の様態副詞の語彙の意味によって、程度副詞が孕む複数の意味領域のどこを入口とするかが決まってくるためである。さらに各意味が現れやすい統語的位置には偏りがあるため、この問題は統語的性質の獲得順序にも不可避の影響を与えることとなる。

具体的には、「ちょっと美しい」のように連用修飾で表現されやすい【程度】の意味を介して程度化した「ちっと」は統語的性質としては副詞性を先行させ、名詞性はその後の変化の中で獲得される。一方、「ちょっとの間」のように時間名詞の連体修飾に用いられることを典型とする【時間量】の意味を介して程度副詞化した「そっと」は、はじめに強い名詞性を見せた後に副詞性の領域へと拡張していく。